

イネミズゾウムシ

1 発生生態

(1)見分け方

体長2～4mm、灰褐色で背中中央に黒い紋があり、口先は長く突出している。(写真1)。外見は近似種のイネゾウムシと似ているが、イネゾウムシよりも体長は小さく、容易に見分けることができる。

(2) 発生のようす

年1回発生する。成虫で越冬し、越冬後の4月から活動を始め、移植直後から5月下旬まで水田に侵入し、イネの葉を食害する。成虫は侵入から3週間後にイネの葉鞘に産卵する。幼虫は7～10日で孵化し、数日以内に土中に潜りイネの根に寄生、食害する。約1ヶ月後に根内で土繭をつくりその中で蛹化する。羽化後は畦畔や森林などに移動して越冬する。

本種は侵入害虫で、1976年に愛知県において初めて確認され、福島県では1982年にいわき市で発生が確認されてから、またたく間に全域で見られるようになった。

成虫の食害は長さ1～数センチメートル、幅1mmの白いすじ条の食痕となる(写真2)。食痕は葉脈に沿って断続的に縦に並ぶ。この成虫による葉の食害よりも、幼虫による根部の食害の方が重要で、寄生数が多いと収量にまで影響を及ぼし、早植栽培で被害が大きくなる。

近年は育苗箱施薬の普及により過去と比較して発生量は少なく推移している。

2 防除方法

育苗箱施薬が一般的であるが、本田内の茎葉散布や水面施用も可能である。

本田での防除適期は成虫の本田侵入盛期(本県では5月上旬～6月上旬)であるが、この時期はアメダスの気温から予測することができる。



写真1 イネミズゾウムシ成虫

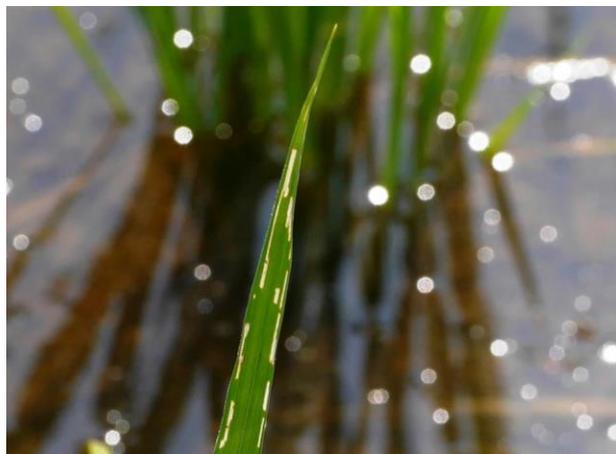


写真2 イネミズゾウムシ成虫の食害痕